

ふたつの「デジタル化」



金属労協(JCM)事務局長
浅沼 弘一

私は神戸生まれの関西育ちで、東京に出てきてすでに30年以上経つが、言葉に関して敏感な時期を関西で過ごした。関西人は多弁で言葉遊びが好きであるが、同時に言葉に対して敏感であるように思う。そんな訳でということでもないが、最近よく使われる「デジタル化」という言葉に、えもいわれぬ違和感をおぼえる。

デジタル化とはいったい何なのか？辞書を引いてみると、デジタルの反対語はアナログであるとある(広辞苑第六版)。そうするとデジタル化というのは、アナログをデジタルに変えることがその本来の意味であろう。最初からデジタルな世界で育った人々とは違って、アナログからデジタルに移り変わる場面を見てきた世代からすると、この意味でのデジタル化は実感としてある。例えば、実験のデータ整理で最初に使ったのは計算尺であったが、そのうち電卓にとってかわった(写真)。アナログな計算機からデジタルな計算機に変わったのである(これ自身、意味不明な方も多かろうと思うが)。

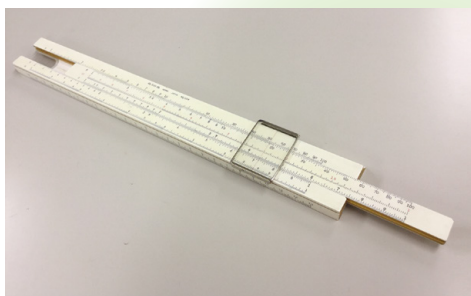
この場合、デジタル化とは、自然現象に代表される連続的な量を、物差しで測って離散的な数量に変えるという作業のこと。私にとって(願わくは我々の世代にとって)、デジタル化とはこれである。英語で言うとdigitizeにあたる。

ところが最近多用される「デジタル化」はそんな技術的で偏狭なことを表しているのではない。元になっているであろうdigitalizeという言葉はここ10年以内の中で作られた言葉のようである。その意味するところは、アナログな情報がデジタル化され、処理するのにも伝送するのにも、扱いやすくなるということに留まらず、広く政府や様々な企業、様々な産業の場において、より高度化した人工知能やもののインターネット(IoT)、莫大な量の情報処理など、様々な先端技術を活用し、プロセスやサービスを効率化・高度化するということまで含んでいる。第4次産業革命とオーバラップしている言葉である。

私の感じる違和感は、この「デジタル化」という一つの言葉に、二つの意味が交錯するところにあるようである。後者の新しい方の「デジタル化」には、これまでにない領域に事業を拡大し、企業の発展につなげていこうという経済的な面からの思惑を感じてしまう。社会や産業に新しい流れを作って、自らの活動領域に利益を呼びこもうということなのではないか。しかし、我々の求めるべき「デジタル化」のアプローチは、

人が原点であり、人々の幸せや分断の解消が目的地であるべきである。経済発展も大切であるが、働きがいや生きがいも大切である。まさに、SDGsにある「働きがいも経済成長も」である。

さて、今号のテーマは、「第4次産業革命とものづくり産業の未来」である。世の中の流れは、どうしても要素技術で何ができるかが先行するため、人工知能が将棋で名人に勝ったとか、ホテルの受付をロボットがやるとか、供給側主導のセンセーショナルな話題に落ちてしまう。利用者側にとって、便利になるとか快適になるとか幸せになるとかというようなことが先に語られることは、残念ながら多くはない。職場・産業・社会がこの革命によって変わって行くことは確かであろうし、我々ものづくり産業は、その最先端にいる。新しい技術の利用者として、その変化に対して受け身になるのではなく、デジタル化の先端技術を自由に使いこなせるよう手中に収め、自らの職場や産業の中で、能動的に活用する、そういう状況を作り出したい。



計算尺(アナログ計算機)

初期のプログラミング電卓
(デジタル計算機)

